
あなたを愛すこと

aira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたを愛すこと

【Zマーク】

Z2807B

【作者名】

アイラ

【あらすじ】

和葉が誘拐されてしまい、平次が助けるとゆう感じです。初めての小説なので読みづらいかもですがよろしくお願ひしますーー！

全ての始まり

改方学園2 - A

「ふああ…疲れた…」

和葉が大きなあくびをしていると

「お前はホンマに色気ないな…」

と和葉の幼なじみの服部平次が呆れたと言う顔で和葉を見下ろして
いた

「い…色気ない…！…しゃ あないやん…！…ホンマに疲れてんから
…！」

「やかましいわ…ほらはよ帰るで…！」

と言つと平次はスタスタと玄関に向かつ

「ちよお平次…！」

和葉が家に帰ると一通の手紙が届いていた

真っ白な封筒に“遠山和葉様”と書いてあるだけで差出人の名前など
が書かれていない

「氣色悪いな…」

と和葉は想いながら封筒を開ける

「…！…！…？…？…？」

“明日、五時に一人で梅田のカラオケボックスの205号室にこい。
もしこなかつたり他言した場合…服部平次を殺す”

「な…何なん…」

とにかく家に入り落ち着いて考える

(平次が殺される…？この手紙はほんまなん…?)

次の日

和葉は学校を休んだ“体調不良”で
もちろんそんなのは真っ赤なウソ

和葉は一晩中手紙について考えたが結論など出るはずがなかつた…

約束の時間まであと三時間

「よし…！」

和葉は覚悟した

(たとえうちに何があつても平次だけは自分で守りたいから…)
ギュッとポケットの中の御守りを握り締めた
和葉の瞳に迷いはなかつた…

和葉はカラオケボックスの前に立ち、深呼吸をすると、ポケットの中の御守りを握り締めて中へ入つていった。

「待ち合わせなんですけど… 205号室です…」

受付でそう言うと和葉は205号室へ向かつた。

（もう… 戻れへん… 覚悟はできどる…） 205号室のドアをガチャ

つと開けるとそこは真っ暗だった

しかも鼻に刺さる臭いがする

（シンナー！？） 和葉はそんなことを気にしてはいられなかつた。

和葉が部屋に入った瞬間

ドアが大きな音をたててしまつた

それと同時に誰かが和葉の口を抑えた

「んぐっ！…」

和葉も必死にもがく（こんなところで簡単にやられたらアカン… 平次にまた迷惑かけてまう… そんなんだけは嫌や…） だが相手は真っ暗で判らないがおそらく体格のいい男

和葉が勝てるはずがない

ひたすらもがく和葉の耳元で男は囁いた

「服部平次を殺つてもいいのか？？」 その瞬間和葉の動きが止まつた
（平次を殺す… ??） 男は小さく笑うと和葉を強引に連れてカラオケボックスの裏口から外へでて車にのせた
明るい所に出るとそこには黒く日焼けした体格のよく背の高い40代位の男と、みるからにヤクザかチンピラといった30代位の男がいた

二人は和葉を乱暴に車のトランクに乗せ手と足に手錠をし、口には

ガムテープを目に隠しをした

そしてその車は走り出した

車の中の和葉に不安はなかつた。

（平次…待つてや…あたしがどうなつても…平次だけは守つたる
から…信じてや…）大阪を一台の車が走つて行つた…

和葉のいない自分…

キーンゴーンカーンゴーン…

「ふう…何とか間に合ったわ…」

汗をかきながら平次は教室に入ってきた

「おつっ！…嫁はんに振られたんか？？」

とクラス中が冷やかす

「アホ…もともと俺とあいつは何でもないやろ…お前らもよお
飽きんのお…」

と適当に流しながら席に着く

すると平次の斜め前に座っている和葉の親友の里奈が

「なあ和葉どないしたん？？風邪なん？」

と心配そうに聞いてきた。

「ああそや。あいつが風邪なんて…」じり雪でも降るんとちやうか？
？」

「それ和葉に言つたら本間シバかれんで」

放課後

（はあ…部活ないからどうせ暇やし和葉んとこ見舞つたるか…そ
ういやおつちやんもおやじとデかい山追つとつてしばらく帰れへん
とか言うてたしな…）

とブツブツ考えながら歩いているうちに和葉の家まで
着いていた。

ピンポーン…！

「邪魔すんでー」

平次は和葉の家の合い鍵を使って中に入つて行つた。

「和葉～見舞いに来たつたぞ～感謝せえよ～」

と言ひながら和葉の部屋のドアを開けるとそこに和葉はいなかつた。

「和葉？？トイレやろか？？」

それにしても和葉の部屋は整い過ぎていた。まるで何年も使っていた
ないかのようだった…

風邪ならむちろん布団で寝ていろのはずなのにベッドの布団にはシワ
一つない…

「か…ずは…？？」

平次はいきなり強い恐ろしさに襲われた

「和葉！？和葉ア！！和葉ア…！」

大声で呼びながら家中探し回る

和葉の姿はどこにもない…

平次は和葉の携帯に電話してみた…

『ＰＵＬＬＥ－』

何度も呼んでも出ない…

（とにかくおっちゃんと親父に伝えんと…）

平次は早くしないと和葉がこのまま永遠に居なくなってしまうよう
な気がした…考えたくもない和葉がいない自分なんて…でもつい考
えてしまう…

そんな気持ちを振り払うかのように平次は警視庁へダッシュした…

和葉の決意

「おら！入れ……」

と男達は和葉を暗闇へ押し込んだ。

その反動で田隠しに手錠をされている和葉は前に倒れ込んだ

「痛つ……」

「あいつの命がおしかつたらなあ、大人しくしどきや。」

そう言つて和葉の手を手錠」と部屋の隅にある鉄の棒に取り付けると和葉の田隠しを外した。

和葉がゆっくり田を開けると中年の男は一ヤリと不気味な笑いを浮かべた。

和葉はぞっとして足がすくんでしまった。

「おい。お前ここに来たてことは……覚悟は出来てるやうなあ……」

和葉は御守りを握り締めて言つた。

「あたりまえや……」

それを聞いた男は二、三度頷くとまた少し不気味に笑つて言つた。
「安心しいや。すぐには殺さへんから。たっぷり痛めつけて……お前が一番辛いやり方で殺したるから……」

和葉は必死に理性を保ちながら男達を睨みつけていた。

「好きにしい。でも平次には手エ出さんといて。」

「ああ、あいつの体は殺さへん。心はズタズタに引き裂いて殺したるけどな……」

和葉の目が丸くなり、男に喰いかかる。

「どうゆづことやー平次に何するつもりやーーー」

「さあなあ？いづれ解るわ。」

「何やって！？」

和葉の怒りはおさまらない。

「あの高校生探偵の服部平次やから警察と協力して近いうち乗り込んでくるやうなあ。」

「そしたらあんたらが捕まるだけや！！」

と言つと男達かキヨトンとした顔で和葉を見てからいきなり笑い出した。

「あんない……俺達は死ぬんや……だから人生最後の飾り付けっちゅうことや」

「……………つたら……やつたらあたしだけで十分やろ！」

和葉の瞳には涙が滲む。

「アカンなあ……俺達の人生の締めくくりくらいみいんなの涙で飾るねんから。」

「やつたらお願いや……平次に電話をせて……お願いや……あんたらのこと喋らへんから……お願いや……」

「わかった。ただし時間は三分や。最後の会話かもしけれへんしなあ

……

「わかった。」

あつがひつ（前書き）

「」では和葉の父の名前を勝手に和則とわせていただきます。

ありがとう

「親父……」

と平次は勢いよく本部長室のドアを開けた。

「平次……どうした？」

室内には平次の父であり大阪府警本部長の服部平蔵と和葉の父であり大阪府警刑事部長の遠山和則、そして大滝警部がいた。

「和葉が……和葉がおらんようになつた……！」

「なんやで……」

和葉の父の和則は声を荒げる。

「平次、どうゆうつ」とや。」

さすがの平蔵も驚きを隠せない。

平次は今までのことを詳しく平蔵達に話した。

「犯人からの脅迫もまだないんか……何が目的なんや……」

四人とも頭を抱える…

その時、平次のポケットの中の携帯が鳴った。

ディスプレイを見ると『和葉』の文字がでている

「和葉からや……」

そう言つた瞬間にみんなが耳を澄ます。

「和葉……今どじや！？」

『平次……？』

「お前今どじにおんねん！……」

『平次何ゆうつてんの？』

「くつ？」

『実はな、あたし今静岡の友達の家におんねん。

一回な平次やお父ちゃん達と離れて生活したかつてん。』

平次達は信じられなかつた。

和葉がいきなりそんなことすることは思えなかつた。

「そんなん……何で俺に言わんかつた？」

『やつて…訴つたり反対された人のわかつとるじ。』

和葉そつ訴つと、さつきまで黙つて聞いていた和則がいきなり携帯を奪つた。

「お前、何めりやくひやな」と訴つたのやへ本間の「こと訴へ。」

『?本間のことやで?信じへんの?』

「和葉つ…」

『しづらくなづらへんから。』

また平次に変わつた。

「和葉…それが本間のことなんやつら今すぐ帰つてこ。」

『…嫌や』

「何でや?」

『何でも…』

しばしの沈黙…それを破つたのは和葉だつた…

『平次…ありがとう…』

ブーブーブーブー

その言葉を残して電話は切れた。

『ありがとう…』

和葉の言葉が平次の頭の中に何度も繰り返される

一週間前

『お前は本間に迷惑ばつかかけよつて…礼くらこゆべ…』

『あおやねえ…死ぬ時になつたらまともて訴つたるわ~』

『何やねんソレ…』

『ええやん』

『死ぬ時になつたらまとめて言ひたるわ』

『ありがとう…』

平次は和葉の決意を悟つた…

和葉は…死を決意していると…

和葉の匂い…

平次は電話が切れた後、何度もかけなおしてみるが出ない。

「和葉が…危ない…」

平次はしばらくその場に立ち尽くしていた。

和則達も黙っている。

「この事は極秘操作や。犯人を刺激せんほうがええ。」

そう言つて和則は部屋を後にした。

「長期戦になりそうやな…遠山…」

和則の背中に向かつて平蔵は小さく呟いた。

平次は我に返り叫んだ。

「親父…俺、和葉探して

くる…！」

部屋から駆け出そうとしたがそれは阻まれた。

平蔵の怒鳴り声によつて。

「待て…！ 平次…！」

平次がピタッと止まり振り返る。

「お前は下手に動くな。本間の標的はお前かもしだへんしな。」

「…親父…そうは言つても和葉が危ないんやで…！」こんな時に自分の安全なんか心配してられるか…！」

「アホ…！ よう考えてみい…！ もしお前が捕まつたら。誰かがお前を捜しに行く。そしたらその誰か捕まつて、そしたらまた誰かがその誰かを捜しに行く。キリがないやろ。」

平次は和葉のため何ひとつ出来ない自分を憎く思つた。

「ほんなら俺は黙つとけ言うんか…？」

平蔵は黙つて頷く。

「クソッ…！」

平次は壁に頭を打ち付けながら何度も呟いた。

「クソックソッ…」

平次の額からは薄く血が滲んでいる。

「平ちゃん…」

大滝警部に止められるまで平次は壁に頭を打ち続けた。

「平次。今日はもう帰れ。明日から、捜査を始める。」

平次は無言で府警を後にした。

トボトボと歩いていたつむに着いたのは自分の家ではなく和葉の家だった。

平次はそのまま和葉の部屋に向かった。ベッドに大の字に寝つこうがると和葉の匂いがする。

昨日まで毎日のように嗅いでいた和葉の匂いが、今はたまらなく恋しい。

「和葉…」

平次は何度も和葉の名前を呼び続けたが和葉からの返事が返つてくることはなかった…

大切な人

「ふつ…なかなか口マンチックなお別れやなあ。」

和葉は黙つて男達を睨みつける。

「テメエ何やその目はあ…！」

チンピラの男は和葉の態度にムカつき怒鳴り散らした。だが、和葉はピクリともせず男の目を真つ直ぐ睨みつけるだけだった。

「ほお…さすがは大阪府警刑事部長の娘やなあ、根性座つとるやんけ…」

そう言つと男は和葉の前髪を鷲掴みにして自分の胸の高さまで一気に持ち上げた。

「痛つ…」

男は和葉の耳元に唇を寄せて、不気味に呟いた。

「その根性…いつまで保つか楽しみやなあ…」

そう言い、和葉を床に投げ飛ばす。

「つっ…！」

「まあ氣長に…辛くて死にたい思ても簡単に死なせへん…覚悟しそきや…」

和葉はゆっくり上体を起こし、再び男達を睨みつけながら言った。

「あたしは…あんたら何かに負けへん…何があつても絶対死にたいなんて思わへん…！」

「そんな根拠どこにある？どこにもないやろが。」

さつきまで余裕な顔をしていた男から不気味笑いが消え、険しい顔に変わった。

「あたしは…平次が助かるなら、どんなことだつて出来るからや…あたしがどんなに辛なつても平次が助かるなら全然辛いとは思わへん…！」

和葉の少し荒くなつた息だけが倉庫に響いている

「服部平次がそんなに大事か？」

恐る恐る男は尋ねた。

「めっちゃ大事や。大切な人がある人にはわかるんや……あんたらは、絶対幸せになれへん！」

和葉が言い終わらないうちに男が和葉の言葉を遮った。

「幸せなんか望んでへん！！」

すごい剣幕をしている。

「何が大切な人や？ 何が幸せや？」

男の顔が和葉に近付いてくる。

「笑わすなボケエ！！」

そう言うと男達は和葉に襲いかかつた。

絆（前書き）

投稿遅れてしません。

受験無事終わりましたのでこれからまた書き続けたいと思います。

和葉が誘拐されて3ヶ月…

平蔵達の必死の捜査も虚しく未だに和葉は見つかっていない。

本部長室には平蔵、和則、大滝、平次の四人が集まっていた。

「そろそろ和葉ちゃんの公開捜査したほうがええんとちやいますか？」

と大滝刑事は提案した。

すると平蔵はすぐに答える。

「大滝、忘れたか？向こうは警察に言えば和葉ちゃんを殺すと言つてきてんねん。」

「そやけど、このままじゃいつになるか…」

沈黙が続く…

やはりもう和葉は殺されているのではないか…
誰もがその可能性を考えていたが誰も口にはしなかった。
和則はこの日何度もわからぬ溜め息をついた。

「はあ……犯人からの要求なしやどこっちも動けへん。」

その時いきなり平次の携帯がなる。

公衆電話からだつた。

誰だろうと不審に思いながら電話に出た。

「ほい、服部…」

《今ひとりか？》

明らかに変声機を使つた声。

「だ…誰やー？」

《大島慎吾…遠山和葉の誘拐犯や…》

「和葉は今どこやー？」

《さあなあ？》

平次の口調が荒くなる。

「何が目的なんや？」

『教えてやる。今日の夜7時、×倉庫に来い。ただし1人でや！そつちの動きは押さえとる。変な真似したらあの娘を殺す。』

「なんやとー？」

『ええな？』

「…わかつた。」

平次がそう言つた瞬間に電話は切れた。

「平次！犯人からか？」

平蔵が眉間にシワを寄せて聞いてきた。

「すまん。親父。俺に任せてくれへんか？」

「何で言わんのや？」

平次はガバッと床に頭をつけて三人に土下座した。

「頼みますわ！俺に任せて下さい！」

しばしの沈黙を破り、和則が口を開いた。

「わかつた。平次くん。和葉を頼んだ。」

平次は立ち上がり和則に向かつて深く頭を下げた。

「必ず和葉を連れて帰ります。」

そう言うと平次はダッシュで大阪府警を出て行つた。

人形

6時…

約束の時間より1時間早く平次は ×倉庫の前にいた。
そして平次にとつてはあつという間の一時間が過ぎた。

そして7時。

平次は息を呑んで持つてきた竹刀を構えた。

そこに一台の車が来て平次の目の前で止まる。

車から1人の男が出てくるなり平次に向かつて銃を構えた。

「おい。ブチ殺されたくなかったらはよその竹刀捨てろ」
と男は不気味な声で言つた。

平次は下手に動くと自分が殺されてしまうので無言で男の指示に従う。

「お前が大島慎吾か？」

と平次が聞くと男は無言で頷いた。

平次が竹刀を捨てたにも関わらず男は銃を構えたまま。
するといきなり後部座席からチンピラのような男が出てきて平次に近づいて来た。

「変な真似すんなや。」

と言うなり平次の手に手錠をかけ、無理やり後部座席に押し込んだ。
男達は平次に目隠しをし、口にはガムテープをはつて車を発進させた。2時間近く車に揺られ、ある場所で止まった。

「降りるぞ」

チンピラに言われて平次は外に出る。

目隠しされていて分からぬが倉庫のようなドアを開ける音がする。
平次の身体が少し震える。

中に入ると目隠しとガムテープ、そして手錠が外された。

平次が中を見回すと隅に誰かがいる。

目を凝らしてみるとようやくそれが和葉と言つことに気付いたが何も言葉が出なくただ棒立ちしていた。

再開の感動や、生きていたことの嬉しさなんかじゃない。

平次の目の前にいる和葉は平次の知っている和葉ではなかつた。髪も服もズタズタに切られていて、身体も痩せたと言うよりやつれたと言つた方が今の和葉には合つている。

そして何よりも…

和葉には表情がなかつた…

死んだような瞳をしている…

「か…ずは…」

蚊の鳴くような声で呼ぶと和葉とは思えない和葉がこっちを向いてゆっくり微笑んだ。

その笑顔は人形のような笑顔だった…

「めんね

平次はゆっくり和葉に近づいていく。

(夢や！これは悪い夢や！)

そう自分に言い聞かせてみるがやはり目の前に居る少女は和葉以外の何者でもなかつた…

和葉の前にしゃがんで頭を撫で始める。

「ごめんな…和葉…本間つ…ごめんな…」

と言いながら平次は涙をこらえるのに必死だった。

近くで見る和葉は身体中にアザがあり、目の中にはクマが出来ている…

和葉に何があつたのかまだ解らないが酷い扱いをされていたのは間違ひなかつた…

平次はすつと和葉の頭を撫で続けていた。

すると和葉が人形のような微笑みで言つ。

「ごめんな、また平次に迷惑かけてしもて…」

その瞬間、平次のこらえていた涙が一気に流れでた。

「アホ…」

絞り出すよつた声で呟いた。

(何やねんこの女…そんなんつ…何で俺に謝んねん…)

自分の無力さと同時に和葉の表情を奪つた男達への怒りがこみ上げる…

ゆっくりと立ち上がり大島達の方を向く。

大島はこっちに銃口を向けている…

平次は和葉を守るように和葉の前に立つた。

「和葉…お前はじつとしどき、絶対に…俺がお前を守つたるさかい

…」

平次は和葉の顔を見なかつた。

和葉の顔を見ると辛いから…

平次は大島を睨みつける。

「おい、はよそこどかんかい。」

「絶対いや。」

「そうゆうんやつたら、無理矢理にでもぞかしたるわ。」

大島がもう一人の男とアイコンタクトをすると男は小さく頷き平次の方へ向かってくる。

その手には金属バットが握られていた。

平次と男の距離は約3メートル。

男はバットを振りかざし平次に突進してくる。「うりやああああああああ！」

守るべき人

ドスツ！！

ドサツ！！

倒れたのは男だった。

平次は金属バットを掴み逆に相手の方に向かつてバットを押ししたのだ。

怒りにみなぎつている平次の力はもはや普通ではなかつた。
バットの先は相手の腹部に直撃し男は氣を失い倒れた。

その時大島が打つた弾が平次の右足をかすめた。

「つ……！」

大島はあざ笑うように言つ。

「もう逃げられん。覚悟しいや。」

さすがの平次も絶体絶命の状況に焦つてしまつ。
その時和葉が静かに呴いた。

「どけて……平次……」

小さく震えた声で何度も何度も呴く……

「お願ひ… 平次… どけてえやあ…」

それを振り払うかのように和葉の方を見ずに平次は怒鳴った。

「アホ… 寝言は寝てから言わんかい… 守るていうたら守るんや…！」

それに驚いたのか和葉はピタリと固まった。

大島は銃口をこっちへ向け、いつ打ってもおかしくない状況だ。緊張感が走る。冷や汗が平次の頬を使って床に落ちた。

するといきなり暗い倉庫に光が差し込んだ。

眩しくてなかなか目が開けられない。

だんだん目が慣れてくるとそこには警察がいて突入する体制になっていた。

「警察や… はよ銃を捨てる…！」

平蔵がメガホンごしに叫ぶと大島は狂ったように叫びはじめめる。

「うわあああああ…！」

バンッ…！

バンバンバンバン

「ふう… これでもう弾はないで…」

自殺しようとした大島を平次がギリギリでとめ、幸いみんな無傷で

すんだ。

大島はショックのあまり氣絶してしまっていた。

病院（前書き）

おくれました（）一・。）

その後、平次と和葉は病院に運ばれた。
平次の足の傷も命に別状はなかつたが問題は和葉。
この事件で相当なショックを受けている。
それは和則や平蔵にも一目瞭然だつた。

梅田総合病院

「…んっ」

「平ちゃん。気イついたか？？」

平次が目を覚ますと自分のベッドの周りで平蔵や静香、和則そして大滝刑事が心配そうに覗き込んでいる。

「親父…和葉は…？？」

と聞くと平蔵は右の方を向いた。

平次もそつちをみると隣のベッドには和葉が眠つている…人形のような綺麗な顔で。

(和葉…)

安心と同時に人形のような和葉を見ると胸が苦しくなつた。

「和葉は大丈夫なんか？？」

平蔵達は人のこと言つてる場合かと思ひながら軽く微笑んだ。

そして和則が口を開く。

「ああ。体中にアザがあるんと極度の栄養失調やけど命に別状はない。」

そこであつて今までの笑顔を消し、一息おいてまた静かに話し始める。

「やけど何があつたんかはまだわからんが精神的ショックは大きいみたいや…」

五人の間に沈黙が流れた。

しばらくしてその沈黙を破つたのは平次だった。

「…あ、犯人は？？」

「大島ともう一人の男も今は安静にしとるが和葉ちゃんと同じく極度の栄養失調みたいや。精神的ショックも大きいみたいやし。」と平蔵が答えた。

「そうか。……それより何で俺の居場所わかつてん？？」

と平次は一番疑問に思つていたことを聞くと、

「実はお前のジャケットに発信機つけといたんや。」

と言つて微笑んだ。

「そうか。」

と言い、平次はアゴに手を当てて考え始めるがそれは和則によつて阻止された。

「平ちゃんも大変やつたし今日へりい休んどき」

「……ありがとうございます…」

平次がそう言つと平蔵達はぞろぞろと部屋から出していく。

「ほんなら、大事にな。」

平蔵達が出て行つた後、平次はもう一度和葉の方を向いた。

「和葉…よう頑張つたな…」

眠つている和葉が少しだけ微笑んだよつな気がした。

悲鳴

1週間後

平次と和葉は無事に退院した。

大島ともう1人の男は義理の兄弟で弟の名前は大島哲也。

二人は元大物実業家の大物雄斗の息子だつたが大島物産が潰れてしまい。

親に捨てられた。

二人は一緒に暮らしながら仕事を探したがなかなか見つからず路頭に迷っていた。

それを聞いた和葉は少し落ち込んだ様子だった。

翌日。

和葉を心配し、平次は和葉の家に行つた。
傷が治るまでは和葉は学校を休んでいる。

「和葉」入るで。」

「うん。ええよ。」

今まで通りの普通の会話だがそこに和葉の表情はない。
それを見てやつぱり聞くのはやめようと思いとどじました。

「なしたん？ 平次？」

「いやあ。ちょっとな」

と言つてベッドに座つて和葉の隣に腰掛けた。

Tシャツから出ている和葉の腕には痛々しいアザが無数に残つている。

平次は胸が締め付けられる思いがした。

そして無意識に和葉の腕に触れようとした……

「きやつ……」

平次の手が和葉の腕に触れた瞬間に和葉が小さく悲鳴をあげ後退つた。

予想外のことには平次は動けずにキヨトンとしている。

和葉は平次が触れた方の腕をさすつている。

暫くして我に帰つた和葉は必死に取り繕つた。

「…あ。ごつごめんな！－ちょっとビックリしてしもて…気にせん
といで。」

「…おお…。」

又、平次も答える言葉がなかつた。

二人の間に沈黙が続く…

「俺…今日は帰るわ…」

「…うん」

その日…平次はなかなか眠れずにいた。

真相

一週間後…

大島慎吾と大島哲也は刑務所内で自殺した
大島らが残した遺書には

「後悔はしていない。」

といったつた一文だつた。

大島達が死んだことで和葉に何があつたか本人に聞くしかなくなつた。

平次は一人部屋のベッドに寝つころがり考え込む。

もちろん考えるのは和葉のことばかり。

（あん時のアイツの反応…めっちゃおかしい…ビックリつて言つくり脅えてた感じやつた…）

どんなに考えてもわからない。そしてもう一つ気になることがあつた（帰つてきてからの和葉はいつもオカンにくつといふ…今までもそうやつたけど今は以上なくらいや…でも親父や俺、遠山の親父つさんのことまでも異様に避けとる…）

アザがあつたことから大島に暴力をふるわれたのはわかつてゐる。だから男を怖がつてゐる。

でもそれだけじゃない何かがあると平次は感じていた。

（暴力だけで和葉がああなるとは思へん。）

この時、平次の脳裏にある事が思い浮かんだが、すぐに消し去つた。（まさかな…）

とその考え方を振り払つかのようにベッドから起き上がりドタドタと階段を下りて行く。

冷蔵庫のなかのお茶をグッと飲み干した。

「つはあ…」

腕で乱暴に口元を拭うとコップをダンッと机に置く。

「クソッ！！」推理をしなくてはならないのに真相を知るのが怖い…

平次は自分の気持ちがわからなく苦しんでいた…

今まで一番近くにいた幼なじみ…

何でも分かり合えていたはずだった…

でも何も分かり合えていない…

今の平次にはそれがひどく悲しかった…

こんな時、気持ちがわかれれば気のきいた言葉をかけてあげられる…

だが今の平次には出来なかつた…

心の傷

その頃…

和葉もまた、一人部屋の中で考えていた。

(あの事だけは、絶対に…絶対に言わへん…)

(でもあたしがちゃんと解決せえへんのかな…)

(あん時もきっと平次のこと傷つけてしまた…)

(あたしどうしたらええんかな…)

数時間前まで和葉の部屋には親友の里奈が見舞いに来ていた。

「和葉　…久しぶ…　り…」

「来てくれてありがとうな。ん??なしたん??

「なしたん??つて…やつて顔…」

「顔??何か付いとる??」

「いや…何でもあらへんよ…」

なぜ里奈は自分の顔を見てあんなに絶句していたのか…
和葉には検討もつかなかった。
とゆうより気付いてなかつた。

自分の表情がなくなつているなんて…

(ホンマ…周りがわからん…)

頭を抱え込んでしまう。

(何か帰つて来てから“あんな事”があつたせいがわからんけど男の人がめつちゃ怖い…みんなあんな人達ちやうのに…)

考えれば考えるほど孤独感に襲われた。

「もひ…いやや…」

和葉の死んだような瞳から涙がこぼれた…

“あの事”は一生和葉の心の傷になる

それを治せる人がいるのだろうか…

和葉は絶対に一生このまま黙つていいよ…

そう誓つた。

また明日から誰も悲しませない…

イツモノジブンを演じることを誓つた。

「これでええ…」

自分に言い聞かせるように口に出して何度も呟いた。

しばらくして気持ちが落ち着いてきた時、和葉はもう一つ大事なことを思い出した。

(あ…平次…アカン…平次にちゃんと謝つて誤解とかんと…)

そう思い、和葉は重い足取りで平次の家へ向かつた。

イツモノジブン

ピンポーン

服部家のインター ホンがなる。

誰も出ていないのに勝手にドアが開いた。

「お邪魔します」

と元気良く和葉が入つて来ると奥から平次の母、静香が出てきた。

「あら～。和葉ちゃんやないの もう外出で大丈夫なん??.」

「オバチャン何ゆうてんの ??バリバリやで!..」

まるで病院で見た和葉とは全然違う和葉の笑顔を見て静香は安心した。

それを偽りの笑顔とも知らずに…

「平次おる??.」

「うん、一回におるから行つて來たつて!! 最近あんまり部屋から出でへんから!!」

「うん!! ありがとうなあ!!」

と笑顔で静香の前を通り過ぎ一階へと続く階段を軽やかな足取りで登つていった。

平次の部屋の前に着くと和葉は目を閉じて心の中で唱えた
(イツモノジブン... イツモノジブン... イツモノジブン...)
そして勢い良く平次の部屋のドアを開ける。

「平次いてる??.」 ベッドの上に寝つこうがつていた時にいきなり大声をかけられた平次はキヨトンとしていた。

「おお。和葉...」

「何してたん??.」

「別に何も...」

まさか本人の前で“お前に何があつたか考えていた”何て言えるほど平次もめでたい性格ではなかつた。

「何やの?? 可愛い女の子がわざわざ來たつて言うんに〜〜」

と嫌みつたらしく言つが平次は未だキヨトンとしている。

それも無理はないだろ?。昨日までの和葉とは全く違うこのものの和葉…

「お…お前に何しに來たんや??」

「用がなかつたら来たらアカンの??」

「そうやないけど…」

「ならええやん」

と言つて平次の机の椅子に腰掛ける。

一人に沈黙が流れる。

「…本間はな、平次に謝りに来てん」

ボソッと和葉が呟く…

「えつ…」

「やつてこの前うちに平次が來たとき…」

「…ああ。そんなん氣にしてへんわ。やから別に謝らんでええ。」

「なら謝らん。」

「…謝らんのかい。」

「謝らんでいいてゆうたやん」

「あのなあ…」

平次が文句を言おうと顔を上げると和葉が一コ一コしている。

「何?? へえ〜じつ??」

とワザとらしく可愛い子ぶつて聞く。

これに平次は和葉の心は戻ったんだ。

そう確信した。

和葉の笑顔に嘘はない…

そう見えた。

いつもの和葉に戻った…

そう見えた。

四年間

それから四年間…

和葉はイツモノジブンを演じ続けた。

“あの事”は誰にも言わずにただひたすらイツモノジブンを演じた。

自分の部屋だけはイツモノジブンと叫う仮面をはずす事を許される。父親の前でも仮面をはずす事は許されない。

そんな和葉の四年間だった。

父親が家に帰つてこない時、和葉は涙を流すことを許される。

大声で思い切り泣いて、泣き疲れて眠る。

そんな和葉の素顔を知る者は誰一人としていなかつた。

高校を卒業して大学に入つても変わらない日々…

平次は東京の大学に通い、上京したが和葉は地元の大学だったので二人は初めて長期間離れてくらした。

以前の和葉なら大好きな平次と離れてしまうなんて絶対に嫌だつたが、今は平次がそばにいなくて安心していた。

平次には何でも見透かされそうな気がするから…

そんな四年間は和葉にとって苦痛でしかなかつた。

和則も平蔵も静香も里奈も誰もが事件のことを過去の事と思い始めた頃だった。

四年間たつた一人苦しんできた和葉はついに荒れはじめた…

平蔵達や里奈の前では必死にイツモノジブンを演じたが夜になると化粧も濃くなり、和則が帰つて来ない日には夜通し遊んでいた。

クラブに行けば何人もの男に声をかけられ、毎日のようにナンパしてきた男に抱かれた。

抱かれている間は何もかもが忘れられた。

昼は眞面目な大学生を演じ、夜は無我夢中になつて遊んでいた。

そんな生活を続けていたうちに和葉はどん底へと落ちていった。
深く、深く、闇は和葉を包んでいった。

一方、平次は大学で毎日のように黄色い声をあびながら過ごしていた。

名探偵として有名で、剣道の腕前もかなりのもの、嫌みのない性格、整った顔立ちときたらその辺の女がほっとくはずがない。

また平次と同じ大学に通う新一も黄色い声をあびながら過ごしていた。

大学ももう一年目で生活も落ち着いて、何かやっぱりもの足りなさを感じる。

今までは忙しくて気付かなかつた平次だがやはりいつも隣にいた幼なじみが恋しくなってきた。

(今度の土日にでも顔見せに行くか…)

土曜日

平次は大阪を訪れた。

両親や和葉に連絡しようとも思つたが、驚かせてやろうと思いつ連絡せずに来た。

この後、この事をあんなにも後悔するとも知らずに…

まずは自分の家に行き門の前に立つとかなり懐かしい感じがした。
(やっぱ自分の家はええな…)

そう思いながら戸を開ける。

「おーい！ オカン居てるか？？」

すると奥の台所から静香が慌てて出てきた。

「平次！…どないしたん！…いきなり…！」

平次は予想通りの静香の反応に満足そうな笑みを浮かべながら言つ

た。

「どう？？驚いたか？？」

「当たり前やんか！！連絡くらいしいやーーー！」

「驚かしたる思てなつ！！」

と言いながら家に上がつていく。

「あ！オカン！！和葉は？？」

と一番きになつていたことを聞いた。

「和葉ちゃんも相変わらずやで！！美人さんになつたけどなーーー！」

「そうか。」

「今日はたしか友達と飲みに行くてゆうてたから明日にでも会つて
きたらええわ。」

と言つてまた夕飯づくりに取りかかつた。

「ほんならちょお出掛けてくるわ！！」

と言つて久しぶりの故郷を見に平次はバイクを飛ばした。

暫く走つていると、見慣れた人影が目についた。

よく見るとそれは和葉のようだつた。

だが平次が目を疑つたのはそれは自分の知つている和葉ではなかつ
たから…

露出度の高い服を着て髪をおろしている。

それに何よりその和葉とは思えない和葉が薄暗い街を知らない男と
腕を組んで歩いていたのだ…

最悪の再会

「か……ずは……？？」

とても和葉とは思えないが容姿や仕草はやはり和葉。
それでも平次は信じられなかつた。

和葉じやない事を願ながら平次は一人の後をつける。
二人は暫く歩くとたくさんのネオンが輝くホテル街へと入つて行つた。

「ううやろ……」

平次も開いた口が塞がらない。

二人がホテルに入るとした瞬間……

「和葉あ……！」

平次は自分でも気付かないうちに和葉の名前を叫んでいた。
唖然としている和葉に平次はズカズカと歩み寄る。

「テメエ何やねん！！」

と言つてきた男を殴りつけ、未だに固まつている和葉をそのままホ

テルへ連れ込んだ。

部屋に入ると平次はすごい剣幕で和葉に怒鳴りつけた。

「お前何やつとんのじゃ…………！」

普段なら負けじといかかつてくる和葉が今日はやけに冷静だ。

「別に平次に関係ないやんか」

その和葉の反応に平次は軽く溜め息をつきベッドに座り込んだ。

「おっちゃんは知つとんのか??」

「知つてゐわけないやん」

と言つて和葉もベッドに腰かける。

「お前…何でこんなことしてんや??」

「ヤリたいから」

率直な和葉の答えに一瞬呆気にとらわれるがまたひとつ溜め息をついて気持ちを落ち着かせた。

「何でや??」

「何が?」

「何でお前そんな変わつてん??」

さつきまで平次の質問に即答だつた和葉が何も答えない。

「何かあつたんか??」

それでも和葉は何も言わずに黙つている。

「おい!! 何か言えや!!!」

と言つて和葉の両肩を掴んで自分の方を向かせて驚いた

あの時の顔…

平次の一一番嫌いな顔：

表情のない和葉の顔：

「お…お前…」

表情のない和葉の顔からは次々と涙がこぼれ落ちる。

その涙はあまりにも純粹過ぎた。

和葉の涙を見て無意識のうちに平次は和葉を抱きしめていた。その瞬間に何かが切れたように和葉は大声をあげて泣き出した。

まるで子供のように平次の胸の中で泣いている…

そんな和葉を平次は強く、だけど優しく抱きしめた。
その日は一晩中わんわん泣いていた…

附白（前書き）

少し過激（？）な言葉使いが使われている部分がありますので苦手な方はお引き取り下さい。（――*）。

告白

和葉は泣き疲れて眠ってしまった。

それでも平次は和葉を離さずに抱きしめていた。

「和葉……」

和葉の顔にはたくさん涙のあとが残った。

和葉のあの表情を見てから平次は胸のモヤモヤが取れなく眠れずにいた。

「ん…へえじ……」

寝言で和葉が自分の名前を呼ぶ。

それに応えるように平次は腕の力を強めた。

そのまま夜だけが更けていった。

翌朝

「ん……」

眉をしかめながら和葉は目を覚ました。

見上げると優しく微笑む平次。

「目覚めたか??」

和葉はいきなり平次から離れた。

「あ…昨日はごめんな。」

和葉は平次と目を合わせようとしている。

そんな和葉の華奢な手を平次は力強く握った。

「何があつてん??」

優しく聞くが和葉は黙つて俯いたまま…

「なあ…おかしいやろ??.お前が知らん男といんなといこ来るなんて

…」

暫くの沈黙が続いたあと、和葉はゆっくり顔を上げた。

「…四年前のあの事件。」

と小さく咳く。

平次はもう和葉の手を握る手に力を込めた。

「…ああ」

「そん時…そん時…つ」

表情のない和葉からまた涙がこぼれ落ちる。

「あたしは…」

レイプされた…」

そう言つたとたん和葉はまた泣き出す。平次はただそんな和葉を見つめることしか出来なかつた。頭に思い浮かぶのは太陽のような和葉の笑顔…

いつも笑つていた…

それが本当の和葉だと思つていた…

和葉の気持ちには一つも気付かなかつた…

わかつてゐつもつで何もわかつていなかつた…

この四年間、毎日どんな気持ちで和葉は過いでしていたのか

考えただけでも辛くてしかたがなかつた…

今感じてゐるのは

自分への嫌悪感だけだつた…

和葉はどうにもはけ口がなこまま本当の自分を隠してました…

和葉は毎日どんな気持ちで過いでしていたんだろつか…

そんなことばかりを考えて田の前で泣き崩れる和葉に対して氣のきいた言葉もかけてあげられなかつた。

告白（後書き）

ここまで見てくださいありがとうございました。（――*）
何か原作で離れていくという感想がありました(*u_u*)
自分で読み返してもそうゆうのがありました(; _ ;)
これから少しでも平次と和葉に近づけるよう頑張っていきます。

平次の涙

一人はホテルを出て歩き始めた。

平次は和葉の肩を支えるようにして歩く。

和葉の告白から一人は一言も話さなかつた。

和葉の家の前まで送ると和葉はゆっくりと平次から離れて顔伏せたままで呟ぐ。

「じめんな…今日のことは忘れてな…？」

そう言うと振り返らずに自分の家のドアまでよろよろと歩いていく。そんな和葉の小さな背中を平次は涙をこらえながら見つめていた。平次は家に着くと直ぐに部屋に行きバタンとドアをしめた。

「…………っつ…クソッ…！」

部屋に入った瞬間に溜まっていた涙が溢れる…

「……ちくしょうつ…！…！」

幸い両親とも外出していたが平次は必死に声を押し殺して泣き続けた…

(三ヶ月…和葉はどんな気持ちであんなかにいたんや…？？)

(それでもずっと俺ン事信じて待つとつた…)

(四年間も…氣いついてやれんかった…)

(俺が氣いついてやれとつたら…)

(何で…何で和葉なんや…)

(今の俺以上に…和葉が辛い思いしつたなんて…)

(本間に…スマン…)

思えば思つほど涙は溢れてくる。

「アイツ…アホや…」

「人のことばつか考えよつてからに…」

平次らしくない平次がそこにいた。

和葉らしくない和葉を想つて…

(俺…かつこ悪…それもそや事件解決してみんなを守るてゆうてん
のに…一番守らなアカン女を守れへんなんて…)

「ははっ…最悪やん…」

と咳やきながら呆れたような泣き笑い…

こんなにも涙を流したのは何年ぶりだろうか…

その夜…平次の涙は止まらなかつた…

親友

昨日寝ていなこともあつて平次は泣きながら眠つた…

翌日

平次は枕元に置いてあつた携帯の着信音で目を覚ました。

『ディスプレイを見ると“上藤”の文字が、こんな時に…と思ひながら電話に出る。

「…はい。」

『服部か？？』

「…おお」

『おめえ何してんだよ？？昨日帰るんじやなかつたのか？？』

「ああ、すまんな。」

いつもなら強く言い返してきただが、素直に謝つた平次に新一は違和感を感じた。

『服部なんかあつたのか？？』

「ちょおいろいろあつてな…しばらく帰れへんかもしれん。」

『いろいろつて何があつたんだよ？？』

「それは言えへん…」

それを聞いて新一はピーンときた。

『和葉ちゃんか？？』

「…」

『わかつた。今は聞かねえ。そんかわり何かあつたらすぐ電話しろ。』

「…ああ。ありがとうな…」

『いや…俺もコナンの時の借りがあるしな。』つちほ上手く誤魔化

しどくから。頑張れよ。』

「ああ。本間すまん。」

『ああ、じゃあな。』

「おお。」

そう言つて電話を切ると平次は大きなため息をつきながら再びベッドに倒れ込む。

やはり新一は平次よりはるかに大人びてると改めて思つ。

和葉の本当の笑顔を取り戻すこと

新一からの電話に励まされ平次は心に誓つた。

もう一度…和葉の笑顔が見たい…

思い立った平次はバイクのキーとヘルメットを持って家を飛び出した。

一台のバイクが風を切って走つて行つた

温もり

平次のバイクが向かつた先はもちろん和葉の家の前いつもなら勝手に入つていいが、今日はしっかりとインター ホンを押す。

和則は昨日も府警に泊まり込みだつたらしい

「はい。どちらで……ま……」

和葉の明るい声と笑顔…

もちろん偽りの…

平次の顔を見た瞬間に和葉の顔から笑顔が消えた

そうんなことを思つ暇もなく和葉は平次の胸の中にいた。

「く……いじ……? ?」

一瞬の後、和葉は平次の腕から必死に逃れよつとしたが平次は決して放そうとしなかった…

「和葉。」

平次の低い囁きに和葉の身体は抵抗をやめた。

「一回しか言わんからよ、う聞くだけよ。」

「……うふ。」

平次は一息置いて少し荒々しく話し始めた。

「俺は和葉が好きや……氣イがおかしくなるくらいや……やからお前の話聞いて本間につらかっただんや……お前が心から笑つとらんと俺が嫌やねん……」

少し息が切れている。

「お前が側におらんとアカンのや。」

ふと腕の中の和葉を見ると泣いていた。

「お前……泣きすぎや……」

と軽く笑つてまた強く抱きしめる。

「やつ……て……」

少しだけ、少しだけだが和葉の瞳に輝きが戻った気がした。

「ハシヲヒドええか、ひ。」

「ハス...」

「無理セカドええから...」

「ハス...」

「そのままお前でええから...」

「ハス...」

平次は暫くそのまま和葉を抱きしめていた
また和葉も瞳を閉じて平次の温もりを感じていた

泣き止んだ和葉は一瞬氣にしていたことを恐る恐る聞いてみる。

「平次...あたし...汚れてしまへんよ...?それでもハシヲヒドっててくれるん??」

「アホ。そんな関係ないやう。」

「和葉は和葉や。」

「…おおやこ」

“和葉は和葉や”

」の言葉を和葉は待ち望んでいたのかかもしれない…

涙が再び和葉の頬を流れた…

「…平次？？」

「ん？？」

「本間にありがとうな…」

「もうええて。」

二人はお互いの温もりを確かめ合っていた。

温もり（後書き）

もつと懐かしくなりと思つたのですが、書いてるうちにこの雰囲気がなつてしまつたのであと1・2話くらいでおわりにします（一）

愛（前書き）

最終話ですーー！

一年後

「平次！…はよせんと遅れてしまつよ…」

「あ もう毎朝毎朝じゃかあしいわ…」

「何やで…アタシがおらんかつたらこいつも会社に遅刻しどる
くせに…」

「なつ…！」

「なあ～？？和季？？」

やつ言つて自分の腕の中の小さな男の子に話しかける。

その男の子も和葉に向かって笑顔で微笑む。

和葉と平次は一年前に結婚した。

もちろんできちやつた結婚だが、見ての通り朝から痴話喧嘩をしな

がら幸せに暮らしている。

和葉と平次の1人息子の和季は一人の喧嘩をみてキャッキャッとほしゃぐ。

そんな和季を優しい笑顔で見つめる和葉：

その笑顔にもう嘘はなかつた。

前のようにいつも心からの和葉の笑顔

その笑顔を見るたびに平次の顔も自然に緩んで優しい微笑みと変わ
る…

「はあ～…本間お前は…」

「お前は何よ？？」

平次は少し視線をズラして和葉を覗くように見る。

そして和葉の唇に軽くキスをする

「ちょお黙つとけ。」

固まつてしまつた和葉に平次は一ヶコリ笑つて駅の方向へ走つて行つた。

「ほな和季！…行つてくるな…ええ子にしてるんやで…！」

「もう…平次のアホ…！」

じつして一人の日々が始まる。

いつまでも笑顔の二人…

それはあの時、流した涙の見返り??

いや…そんな笑顔じゃない。

二人の笑顔は幸せの笑顔…

それはお互いに愛し合つてる証拠…

いつも自分らしくいられる」と

それは自分を愛してくれる人がいるから出来る」と

いつも笑顔でいられること

それは幸せじゃないと出来ないこと

誰かを愛すひと

それはこの世で一番大切なこと

あなたは人を愛していますか？

愛（後書き）

ここまで読んでくださった皆さん本当にありがとうございます…！
初めての小説が無事に完結できて嬉しいです（^ ^）
この話は愛をテーマにしてかなり辛い話で平和ファンに申し訳なか
ったのですがたくさんの方々のアドバイスやお褒めの言葉に支えられて
完結できました！！
本当にありがとうございました…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2807b/>

あなたを愛すこと

2010年10月9日21時15分発行